

監修

高木市之助
山岸德平

久松潜一
小島吉雄

和泉式部集
小野小町集

窪田空穂校註

監修

高木市之助
山岸德平

久松潜一
小島吉雄

和泉式部集
小野泉
小町部
集

窪田空穂校註

朝日新聞社刊
日本古典全書

窪田空穂（くぼたうつほ）

明治十年長野縣生。昭和四十二年歿。早稻田大學卒。早稻田大學名譽教授。藝術院會員。主著「歌集」「まひる野」「土を眺めて」等十數冊。萬葉・古今・新古今集の全評釋、窪田空穂全集等。

日本古典全書

「和泉式部集・小野小町集」

窪田空穂校註

昭和三十三年十月五月初版發行

昭和四十八年十月二十日第七刷發行

印刷所 大日本印刷株式會社

發行所 朝日新聞社（東京都千代田區

有樂町・大阪市北區中之島・北九

州市小倉區砂津・名古屋市中區榮

定價 五四〇圓

目次

和泉式部集

解 説	三
和泉式部の傳記	三
作品とその時代	九
式部の性格と歌風	二
凡 例	一七
和泉式部集 第一	一九
和泉式部集 第二	四六
和泉式部集 第三	七三
和泉式部集 第四	九四
和泉式部集 第五	一二〇
目 次	一

和泉式部・小野小町集 二

和泉式部續集 上 一四六

和泉式部續集 下 二〇四

拾遺 二五八

小野小町集

解説 二六九

小町の傳記 二六九

和歌史上の小町 二七三

凡例 二七六

小野小町集 二七九

初句索引 二九五

和泉式部集

窪田空穂

解 說

和泉式部の傳記

和泉式部の傳記は明らかではない。しかし小野小町などにくらべると、時代關係から、おのづからその研究資料となりうる文獻が多く、従つて諸家の檢討によつてかなりの程度まで明らかになつてゐる。以下、その大梗を記す。

父は大江雅致まさむねである。大江氏は累代の儒家で、彼も文章生もんじやうのしやうとなり、それと共に任ぜられる式部丞しよとなつたと見える。累進して受領すりやうとなり、その位地の者の任ぜられる太皇太后宮（朱雀天皇の皇女昌子内親王で、冷泉天皇の皇后）の大進だいしんとなつた。一條天皇の長保元年（九九九）のことである。後、木工頭もくのかみとなつたが、これは四位の者の任ぜられる官で、その出自しよじからいふと稀れに進み得る高官である。

母は越中守平保衡やすむねの女であつた。

和泉式部の生年も歿年も不明である。與謝野寛、晶子共著の日本古典全集「和泉式部全集」には、檢討

の結果、生年は圓融天皇の天延二年（九七四）であると測定してゐる。これに従ふこととする。

和泉式部の名は不明で、娘時代は式部と呼ばれてゐた。これは女房としての呼び名で、仕へてゐたのは多分太皇太后宮だらうといふ。

和泉式部の名が文獻に現はれたのは一條天皇のときに成つた拾遺集に、その歌が一首撰入された時で、歌は、

性空上人のもとにのみて遣しける

雅致女式部

暗きより暗き道にぞ入りぬべきはるかに照らせ山の端の月

といふのである。雅致女式部といふ名が、和泉式部の當時の環境を語つてゐる。太皇太后宮は播磨書寫山の性空上人に歸依されてゐた關係からであらうといふ。歌は法華經化城喻品の一句「從_{ヨリ}暗_キ入_ニ於_ニ暗_キ、永_ニ不_レ聞_ニ佛名_ヲ」によるものであるが、この當時は名歌として喧傳されたといふ。

和泉式部が父雅致とは懇親の間であつた和泉守橘道貞と結婚したのはその後のことで、一條天皇の長徳元年（九九六）の頃であり、年は廿三歳であつた。和泉式部といふ名となつたのはこの爲である。二人の間に一女の生れたのはその翌年頃のことであつたらうと言ふ。それが後の小式部内侍である。

大江雅致が太皇太后宮の大進に任ぜられた年、以前から病氣で惱まれてゐた宮は、療養のために雅致の

邸に移られた。所替へをして療養を試みる當時の風に倣つてのことである。この邸は橘道貞の物で、雅致は婿が和泉に在任してゐる留守中を借りてゐたのである。道貞は太皇太后宮の權大進を兼任することになった。太皇太后宮は、この年の冬、終にこの邸で崩じられたのである。

冷泉天皇には四皇子があり、第一皇子は花山天皇、第二皇子は三條天皇、第三皇子は爲尊親王、第四皇子は敦道親王である。第三、第四の二親王の母は、藤原兼家の女の贈皇后超子であるが、若くして世を去られたので、二親王は太皇太后宮昌子を母として親しみ、爲尊親王は病中の昌子を雅致の家に見舞ふうちに和泉式部と知る間となつた。太皇太后宮の崩じられた翌年即ち長保二年（一〇〇〇）のことであつた。時に親王は廿二歳、和泉式部は廿七歳と推定されてゐる。

親王は端麗で、物に拘はらない人であつた。この事は當時の評判となつた。橘道貞は妻を離別した。雅致は怒り悲しんで娘を勘當して、その家より追つた。

然るに長保四年、彈正宮爲尊親王は廿四歳をもつて早世されたのである。

翌長保五年、故宮の弟帥宮敦道親王から式部の許へ懸想の歌が寄せられて來た。佗びしく過してゐた式部はたやすく應じて、情交が結ばれた。この宮も端麗であつた上に文藝の才のゆたかな人であつた。宮は式部に限りない魅力を感じて、すでに左大臣藤原濟時の二女を妃としてゐられたに拘はらず、高貴の身としては不自然極まる状態で通ひつづけられたが、終にその宮の南院に移らせて近侍せしめたのである。宮

の妃は屈辱に堪へず、その邸を去られたのである。それは長保五年（一〇〇三）のことである。ここに至るまでの一切を三人稱を用ゐて記したのが「和泉式部日記」である。

和泉式部が帥宮の邸に住んでゐたのは寛弘五年（一〇〇八）までの足掛け五年間であつた。それはこの年宮は廿七歳の短命をもつて薨じられたからである。式部は卅四歳と推定されてゐる。この間のこととして窺はれるのは、宮から題を與へられてかなりの多くの歌を作つたこと、又、宮の供をして白河の離宮の花見にゆき、その宮の預り藤原公任と歌の贈答をしたことなどであるが、今一つ尋常ならぬ事があつて、「榮花物語」と「大鏡」とに傳へられてゐる。寛弘二年四月の賀茂の祭に親王が式部と同車して、藤原道長の長男頼通が祭使に立つのを見物した際の様である。宮は牛車の前簾を高く捲き上げ、式部の方は下まで垂らして見えなくし、紅の裳だけを現はして、その裾に赤い幅の廣い紙に忌中と書いて、地にとどくまで垂らしてゐた、といふのである。これは傍若無人の振舞で、當時の親王の心事の尋常でなかつたこと、又式部の親王に感溺してゐたことを想見させるに足るものである。しかし「大鏡」の作者は、この様を目にした人々は興ある事に思つたと傳へてゐるのである。この時親王は廿五歳、式部は卅二歳といふことになる。

式部の親王を悲しんだ歌は、歌集中の一つの頂點をなしてゐる。全部で百廿四首の多きに及んでゐるが、その純真さと哀切さは前古を空しうするものである。式部はその男性に對して持つてゐた夢の全部を

親王によつて満された観がある。

式部は、一條天皇の中宮彰子（しやうし）の女房となつた。彰子は藤原道長の女であり、道長はわが娘の周圍に一代の才媛を侍せしめようとの心からのことで、紫式部も既に仕へてゐたのである。時は寛弘六年（一〇〇九）で、敦道親王の一年の喪の終つてのことだらうといふ。

和泉式部といふ名は、この時からのものである。彼女は中宮からも道長からも厚遇された。橘道貞との間に生れた女子も、中宮の女房として仕へることとなり、重用されて内侍となつた。即ち小式部内侍である。道長の庇護を受けるやうになつてからの成りゆきとして、式部は道長の家司（けし）（家令）の一人であつた藤原保昌（やすまさ）の妻となるに至つた。保昌は受領階級の人で、當時武力の上では源頼光（よりみつ）と並び稱されてゐた人で、文雅は解さない人であつた。その時は寛弘六年で、五十二歳であつた。式部は卅六歳になつてゐたと推定される。保昌は丹後守となり、式部も伴はれて夫の任地に下つた。

小式部内侍は、母に似て美貌と才情をもつて聞えてゐた。十四歳にして夙くも歌合の歌人に加へられた時、その局（つぼね）の前をとほつた藤原公任の子定頼（さだより）が、丹波からの返事は來ましたかと聲をかけた。歌合の歌を母から代作して貰つたかの意である。小式部は即座に「大江山生野（やまの）の道の遠ければまだ踏みも見ず天の橋立」と詠んで答へたといふのである。この歌は小倉百人一首にも取られてゐて、この事は當時有名なものでつたのである。

時代は一條天皇より三條天皇を経て、後一條天皇となつてゐた。その寛仁二年（一〇一八）小式部は、藤原道長の二男左大將教道の男子を生んだ。小式部は廿二歳、式部は四十五歳といふことになる。それより八年後の萬壽三年（一〇二六）小式部は頭中將藤原公成（のみなり）の男子を生み、その産の爲に死んだ。

式部の小式部の死を悲しんだ歌は、数はさして多くはないが、何れも母性愛の純情を極めたもので、これ亦、歌集の一つの頂點をなしてゐるものである。

和泉式部歌集で最も数の多いのは、彼女が男の贈歌に對しての返歌である。贈歌とその作の主を擧げてゐるのは僅に三四の人に過ぎず、他は皆返歌のみである。何れも情交を結んだ人と解されるが、その數のどれほどであつたとは推定ができない。性生活に對しては放縱で、極めて寛容な時代であつたが、式部のこの状態は、目に餘るものとして非難されてゐたことが、歌集の上でもわかる。現在から見ると、常規を逸した病的のものに思はれる。或時、庇護者藤原道長が、そこに捨ててあつた扇を、和泉式部の物と聞くと、「うかれ女の扇」と落書きをした。うかれ女とは魂の身を離れた正氣のない女の意である。それと知ると式部は歌をもつて反抗氣分を表はしてゐる。彼女としては、心中何らかの依り所があり、言はれるときでは無いと思つてゐたと見える。實際、贈歌のない返歌を見ると、戀の歡びを詠んだ歌は全くない状態で、恨みがあり、憎みがあり、皮肉があり、冷嘲があつて、時に自身をも大觀して、鋭い批評を加へてゐる。何れも實感の表現で、一種の光を帯びたものが少くない。故敦道親王を思ひ、道貞を思ふとは對蹠

的なものである。即ち純眞の愛を求めて、得られれば身を擧げて陶醉し、得られなければ憤りを感じて反撥したので、何れも徹底的であつた心の跡を示してゐるものだと言へる。

和泉式部の死は、後一條天皇の長元六・七年（一〇三三—一〇三四）頃で、六十一・二歳であつたらうと推定されてゐる。

作品とその時代

歌人としての和泉式部の業績は、諸勅撰集に撰入された歌と、その私家集によつて全貌が知られる。勅撰集の歌も私家集に收められてゐるので、區別するには及ばないとも言へるが、勅撰集と私家集とは性質を異にするもので、その人の社會的、個人的の面を併せ観る上で區別して観る方が便利である。

勅撰集は周知のごとく、天皇の意志から行はれることで、その時代の文華を後代に誇示するためのもので、撰者もその旨を體して事に當るのである。即ち撰者自身も秀歌と認め、時代もそれを承認する歌を撰ぶことが條件である。言ひかへると時代の反映である。撰者によつて前代に中心を置く人と現代に置く人との差があるが、何れにしても上の條件の範圍内のことである。私家集はそれとは異り、一に作者自身の好尚に隨つて記録してゐるもので、作者その人のみの物である。

和泉式部の歌が時の流れの上に如何なる評價を受けてゐたかを、最も簡単に知る方法として、この人の

娘時代の勅撰集である拾遺集から、八代集の最後の新古今集に至るまでの、撰入歌數を見ることとする。

拾遺集では唯一首であつたが、それに次ぐ後拾遺集即ち、三條、後一條、後朱雀、後冷泉、後三條の六代、八十餘年を経て、堀河天皇の應徳三年（一一八六）に成つた勅撰集では、六十七首を撰び入れられて最高位である。

それに次ぐ金葉集即ち鳥羽天皇を経て崇徳天皇の大治二年（一一二七）に成つた勅撰集では、入撰歌は五首ですくない。撰者源俊賴は現代を重んじて、自歌を最高位に置く態度を取つてゐるからである。

それに次ぐ詞花集即ち、崇徳天皇の仁平元年（一一五一）に成つた勅撰集では、第二位で十六首である。次ぎは千載集、即ち後鳥羽天皇の文治三年（一一八七）に成つた勅撰集であるが、これには二十一首撰ばれて第六位である。

これに次ぐのが新古今集で、即ち後鳥羽院の元久二年（一二〇五）にまづ成つた勅撰集で、撰者は藤原定家、同家隆、同雅經、同有家、源道具の五人で、他に寂蓮法師も加はつてゐたが、これは中途で入寂した。この集も現代に中心を置いたものであるが、古人も閑却し去らずに加へてをり、和泉式部は古人としては紀貫之に次いで第二位、二十五首とられて、柿本人麿の上位となつてゐるのである。

以上で明らかやうに、和泉式部は死後益々重視され、撰者が前代を念頭に置く限り、棄て去ることのできない歌人となつてゐたのである。女流歌人でこのやうに重視された人は、平安朝時代よりこの時代ま

での久しきに亘つて彼女が唯一人あつたのみである。この評價は無論時代の與へたもので、撰者の承認せざるを得なかつたものなのである。

勅撰集の撰者は、事の性質上、撰入歌に對して多少の加筆を許されてゐる。故人である和泉式部の戀の歌は、殊にその要があつたかに見える。しかしその加筆した撰入歌は、私家集の歌に較べると見劣りするものが常である。このことは明らかに、和泉式部の實力の卓越を語つてゐることである。

式部の性格と歌風

勅撰集における和泉式部より轉じて、和泉式部歌集正續二集におけるその作品を観ると、その複雑多様、變化極まりない短歌と、それをとほして躍如として現はれて來る和泉式部その人の面目に瞠目させられる感がある。彼女の歌は、いはゆる歌として詠んだものではなく、彼女の刹那刹那の感動が、おのづから歌の形式を取つて流露してをり、歌と作者その人とが一體となつてゐるからである。

和泉式部歌集は正續とも、大體勅撰集風に部立がしてあり、春夏秋冬、戀、哀傷、雜といふ風になつてゐる。四季の歌は、式部の生存した拾遺集時代の歌風に随つたものが相當數ある。拾遺集は古今集によつて創められた新風を追つてゐるものであるが、その昂揚を期しての詩情は次第に低下し、一と口に言へば散文的傾向に陥つてゐた時期である。題詠が重んじられ、表現の上では縁語、かけ詞の技法が喜ばれて、

いはゆる氣の利いた、柄の小さい歌風となつて來てゐた。又、短歌には宿命的につきまとつてゐた社交的儀禮の作風は一段と濃厚であつた。和泉式部もこの雰圍氣の中に生きてゐたので、おのづからその傾向を持つてをり、四季の風物詠、雜の中の社交的の歌はこの圈内のものである。しかしこの人はその生來として、實感の裏づけのない事は言はない人だつたので、題詠にしても、題詠的なものにしても、必ず何らかの實感が盛り込まれてゐて、細かい味を持ち、しみじみとした聲調を帯びてゐるなど、いはゆる一と節ある歌としてゐる。

この種の歌は、その數から言へば、相當數であるが、全歌集の與へる感味の上から言へば一部分に過ぎないものである。

和泉式部の式部たるゆゑんは、これを部立の上からいへば、戀、哀傷、および雜の中の歌で社交的儀禮を離れて無拘束に詠んだものにある。この面における歌は、上の題詠、又題詠的なものに比較すると、全く別人の觀がある。

この面では和泉式部は、その全面目を發揮してゐる。その中核をなしてゐるものは、この人は自身の本能的欲望に權威を認め、それを遂行してゆく上では何物をも憚らず、その屬してゐる環境から解放されてあるかのごとき態度を取つてゐたといふことである。

本能的欲望は、女性である和泉式部に取つては愛欲である。愛欲には男性が伴ふ。彼女には傍らに男性